

The Roots of Asia 1 "Sha a ya"

Discussion report

今回のディスカッションは、wahyudin さんが今回の展示会の意味がとても大きいと感じて、ビダダリの執行部の方に、ディスカッションを申し入れたものである。ビダダリとしては、今回の催しの一環ではディスカッションは控え、The Roots of Asia2が開催される前に、1の報告をふまえるつもりであった。現在のバリ芸術環境を考えるとこの展示会の意味が浸透するにはある程度の時間が必要とっていたからである。

しかし、彼らの強い意向と彼らが関係者を集めるということでディスカッションを催した。マレーシアの関係者は、既に帰った後であった。

出席者

ビダダリ執行部

マデ スディアナ、和田浩美、他スタッフ

インドネシア、

wahyudin, Putu Wirata Dwicola, Wayan Kun Adnyana,

作家 Erawan, Noor Ibrahim, Wayan Madra, Ketut Geledih,

日本

藤原恵洋教授、秋葉美知子、藤原馨、李粉善、金子基興ご夫妻、成瀬潔、

作家 西岡泰心、知足院美加子、

ディスカッションの内容

wahyudinさん と putu wirata さん

1、今年、バリでもジョグジャでもピエンナーレを行った。

2、バリ、ピエンナーレのコンセプトについての説明 (Putu Wirataさん)

今回は、外国のアーティストでもバリに直接関係したことのある、バリで作品を作ったことのあるアーティストだけを集めた。なぜなら、バリのアートは多くの国から影響を受けてここまで来ているから。

3、次回への課題

次のためのステップアップのためネットワーク作りを進めていきたい。

藤原先生

1、まずは、このThe Roots of Asia をどう思うか？

wahyudinさん

1、インターナショナルな展示会である。

有名な人を集めている。

2、もう少し、ジョグジャの方にも、展示会の広告を出してほしかった。

3、いろいろな、(多様な)彫刻の形があり、とてもおもしろい。

いろいろな国の人に来て一緒にコラボレーションをしていることがとても興味深い。

藤原先生

1、それが、更に発展してきて、Artist in residenceという形に発展していくのだと思う。

Wahyudin さん

1、小さくても始まった。

Putu Wirataさん

- 1、Rootsということで、日本のルーツを説明するコーナーを作ったらいいのではないかな？
伝統的なものからどういふうに現代の彫刻に発展していったかが知りたい。
他の国、マレーシア、についても同様にしたい。
- 2、今回の展示会から学んだことで、ルーツにはいろいろな見方が必要ということがわかった。だから
次回のバリビエンナーレの時に、この展示会を一緒に同時開催したい。

藤原先生

- 1、The Rootsとは、（今回のコンセプト）
自分とは、何者かを問いかけていくことである。木の根っこのように自分たちの足下を確認すること。
たとえば、鳥毛さんは日本で以前ある会社の社員だったこともある。その時の社長さんが来て、鳥毛さんの変わり方に驚いた。
しかし、これは、鳥毛さんが自分とは何ものかを問いかけた先に行き着いた答えである。
また、今回の日本からの作家である知足院さんと西岡さんの作品は、アートは美術館だけのものではない、ということ自分を表現し行動している作家である。
アートはコミュニケーションであると思う。
近代が歩いてきた道はとも危険をはらんでいた。近代に象徴される"EGO"という言葉は、とても危険なものである。
エゴがあると、自分の周りに垣根を作ってしまう、新しい芸術や人に会うことができない。
バリもそうですが、アジアはもともと皆が助け合う共同体と言う考え方が根本にあり、アートをコミュニケーションの道具として使ってきた。
そのすばらしい考えに、戻ってみよう。また自分とは、何者かとい直してみようということが、今回の展示会のコンセプトである。
- 2、ビエンナーレやトリエンナーレについて
その目的は、作品が人に出会うところということである。
されは、作家のためにあるのでも、キュレーターのためにあるのでもない。
たくさんの方が作品に出会うためにある。だから会場に作家がいて、どこかでワークショップが開かれていることが必要である。
今回、西岡さんも3日間でバリ人であるピダダリのスタッフと3日間のワークショップをした。

各アーティストの言葉

Noor Ibrahim

自分の作品がどうして今の形になったかのエピソード
学校時代勉強した延長でいくと、自分の作品はどこかピカソに似ているとか、しかしそれを超えられるものではないというジレンマから作品を思いっきりハンマーで殴ってしまった。ぼこぼこになった作品をみた自分の子供と妻がここが川だとかここが山だとか話している。それを聞いてはっとして自分の作品に気がついた。それ以来自分はこのような作風をとっている。

Erawan

インドネシアはもっと芸術環境を整えることが必要で、これからバリと日本の交流が深まればいいと思う。今まで日本は芸術を含め全て、欧米に向いていたとおしゃるが、インドネシアの芸術もそうである。どうしてかという流れに乗り遅れてしまいますような感じで、大きい声を上げることができない状況がある。アジアの伝統をこれから守っていければいいと思う。

西岡泰心

いいたいことは、ほとんど藤原先生がいつてくれた。私は最初話があったときは自分のものは、生活に使うものであると芸術作品として展示会に出展することが適当か迷っていた。しかし今回の展示会に出品できて、地元のバリの人や他の国に人と交流もできて、本当に良かったと思う。

知足院美加子

自分の作品は、おわらない。見る人のために手を加えられるぎりぎりのところで留めてある。
もっと自分の作品をアジアで見てもらうように広げたい。
今まで、日本の表現がいつも近くにあったが、今回インドネシアの表現を勉強した。バリの作家のところに行ったが、いろいろな見方、技術があることがとても勉強になった。

まとめ

前書きで記述したように、今回はビエンナーレ主催者の提案で実行された。バリ、ジョグジャとも今年は第1回目のビエンナーレが開催され、バリでは、12月30日にその幕を閉じた。それは、第1回目ということもあり、いろいろな反省点が内外からも寄せられている。スポンサーからのフィナンシャルマネジメントができず、ビエンナーレにおけるカタログ製作ができてなかったこと、ビエンナーレと地域の結び

つきが無視されたこと、目的を明確にしてなかったこと、コンセプトを絞りきれなかったことが大きな反省点としてあげられている。結果としてビエンナーレ自体が作家と関係者だけのものにとどまってしまったことは、今後反省してゆくべき点である。しかし、ビエンナーレと言うひとつの動きがインドネシア、パリでも始まっているということは、インドネシアでの芸術環境の転換期にあるひとつのシンボルとして重要である。

そのひとつの考え方として、今回の展示会とディスカッションを通じて、ビエンナーレの主催者に、小さく完璧ではないとしてもこの展示会の考えを提示できたというのは、良かったと思う。The Roots of Asia 1"Sha a ya" の主催者としても今後、この展示会とディスカッションがいろいろな方向に影響を与えていくひとつの布石となるということで歓迎したいと思う。

今回のディスカッションを通じて、

日本からの招待者の経験や考察とビエンナーレ主催者の間にある芸術環境を創設することへの理解に、温度差があることが更にはっきりした。今後も、ビダダリ執行部としては、藤原先生やいろいろな方の協力を得て、そのインドネシア全体の芸術関係者に日本で考えられている芸術環境やアートマネジメントについての研究の橋渡しをして行きたいと思う。

The Roots of Asia 2が開催される時には、両方に共通の問題提起があり、ひとつのステージの上で議論できるよう、今パリでできることを通じて内容を続けて詰めていきたいと思う。

日本、インドネシア両方から出席していただいた方々に感謝し、御礼を述べたいと思う。

ビダダリ アート
I Made SUDIANA
和田浩美